

UKRAINE GETS READY

# それでも ウクライナは 五輪へ向かう

PHOTOGRAPHS BY SUSANA GIRÓN

2024年パリオリンピックの開幕が7月に迫っている。ウクライナにとっては、ロシアの侵攻後初めての五輪だ。戦時下においてもウクライナは、代表選手への惜しみない支援を続けてきた。世界最大のスポーツの祭典で、自国の選手を奮闘と、侵攻に立ち向かうウクライナ国民に国際的な関心を集めているからだ。重要なことを心得ているからだ。

ウクライナのスポーツ界は戦争で深刻な打撃を受けた。青年スポーツ省によれば侵攻以来、選手やコーチら400人以上が命を落とし、破壊されたスポーツ施設は350以上。ロシアと同盟国ベラルーシの選手が「中立」選手として五輪参加を許されたことは、同国で激しい反発を呼んだ。そんな状況下で、選手らは

どうにかして競技人生を続ける方法を探っている。拠点を外国に移す選手もいれば、首都キーウにとどまる人もいる。安全な練習環境を整備したキーウのオリンピックセンターは、今、大勢の選手でごった返す。その中には戦争が生んだ新たな選手団の姿も——戦いで重傷を負った退役軍人らだ。彼らはパラスポーツへの挑戦で、新たな生きがいを見いだそうとしている。



ウクライナの首都キーウにあるコンチャ・ザスバ・オリンピックセンターで五輪に向けてトレーニングする代表選手





(左)フェンシングのバレンティナ・ダーメンジーはキーウにとどまり練習を続けるが、たびたび警報で中断を余儀なくされる／(下)ボート競技選手の息子アレクサンドルの獲得メダルを眺める母アントニーナ・セルイエンコ。息子はロシアの侵攻開始後すぐに招集された



(下段右から)体操競技の有望選手ウオロディミル・コスチュクはオリンピック金メダルが目標。「この戦争が私から大きな夢を奪うことはできない」と語る／キーウ近郊イルビンのタックス大学はロシア軍の爆撃で校舎だけでなく競技場も被害を受けた／柔道選手のアナスタシア・スパーソンは侵攻開始当初、ポーランドやスペインに移って練習を続けたが、安全な練習環境を捨ててキーウに戻った。今は自宅から45分かけてキーウ南西の練習場に通う







(上段右から) 傷病兵による国際スポーツイベント「インビクタス・ゲーム」出場のためアメリカに向かう選手を家族らがキーウの駅で見送る / ウォロド・スラボロドスキは体操チームの理学療法士を務める。今やロシアの占領地域となった東部ルハンスク(ルガンスク)から2014年、家族と共にイルピンに移った / スペインのジローナに練習拠点を移しバニョラス湖でトレーニングを積むボートチーム



▶ Photographs by Susana Girón |

**撮影:スサナ・ヒロン** スペイン南部・グラナダ出身。体育学の修士号を取得して教職に就くが、後に写真と視覚芸術を学び、ドキュメンタリー写真家となった。脚光を浴びることがない日常の中の記憶、時間、撮影場所のアイデンティティや文化をテーマに作品を制作し、欧米の主要誌、新聞などで発表している

(右) キーウのコンチャ・ザスバ・オリンピックセンターでインビクタス・ゲーム出場に向け練習に励むアーチェリーのパラアスリート / (上) ウァディム・ヒルチュクは昨年9月の戦闘中に負傷し、両脚を失った。常にアマチュアスポーツを楽しんできた彼は、友人の助言でパラスポーツへの挑戦を決意。アメリカで行われるインビクタス・ゲームでアーチェリー、車いすバレーボール、屋内ボートの3種目に出場する